怒りの感情生起と個人特性の関係についての実証的研究
－否定感情表明と自己愛的甘えに焦点をあてて－

長　澤　里　絵[*1]・齊　藤　　勇[*2]

An Empirical Research on the Relation between Feelings of Anger and Personalities
－Focusing on Expression of Negative Feelings and Narcissistic *Amae*－

NAGASAWA Rie and SAITO Isamu

Abstract

The purpose of this study was to examine the relation between occurrences of anger derived from Expression of Negative Feelings from friends and some personalities, such as aggression, narcissistic *amae*, and self-acceptance. The participants were 121 university students, 59 male and 62 female. Factor analysis on Expression of Negative Feelings was conducted and two factors, “intentional inflicted harm” and “expressing unpleasantness” were identified. The results of the comparison indicated that when intentional inflicted harm and expressing unpleasantness were applied to the participants, those participants rated high in “need for concerned attention” felt angry significantly more than those rated low. It was deduced that those rated high in need for concerned attention felt angry regardless of the existence of intent to harm. When expressing unpleasantness was applied to the participants, those participants rated high in “hostility” felt angry significantly more than those rated low. The results also indicated that there was similar tendency in “unreasonable expectation to be tolerated” versus expressing unpleasantness.

[Keywords] anger, Expression of Negative Feelings, narcissistic *amae*

問題と目的

人間の感じる不快感情のひとつが怒りである。Averill（1982）による怒りの経験調査の追試研究を大渕・小倉(1984）が日本において行なったところ、有効回答者の約80%が、過去１週間に１回以上怒りを経験しており、怒りが、人間が頻繁に感じる感情のひとつであることが示された。喜びなどの快感情と異なり、怒りという感情は、それのもつ攻撃行動との密接な関係を懸念され、多くの場合嫌悪、回避、抑制すべき感情であると捉えられている。

怒りとその表出に関する心理学的研究のアプローチのひとつに、社会構成的アプローチがある（高木・阿部，2006)。このアプローチの代表的な研究者であるAverill（1982）によると、怒りは欲求不満に対する反応のような原始的な感情ではなく、怒りを感じている状態を他者、自分自身の双方に示し、信じることによって、結果的には対人関係の調整に役立つといった社会統制機能をもっている。

感情を、社会的に構成された、社会的機能をもつものと考えるAverill（1982）は、感情のひとつである怒りに関しても、個々の原因のみならずそれを取り巻く社会を含めて捉えるべきだと主張している（高木・阿部，2006)。この社会構成的な立場からは、怒りという感情に対して単一の定義を与えることができないという見解がある（高木・阿部，2006)。そのうえで湯川（2005）は、怒りが認知的、生理的、進化的また社会的な側面からなる感情であることを考慮し、「自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態」(p.107）であると定義した。これは怒りを包括的に捉えたものである

＊１　立正大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程
＊２　立正大学心理学部教授

と考えられるため、本研究では、この湯川の定義を用い、「怒りとは、自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態」と定義することとする。

大渕・小倉（1984）の怒りの経験調査では、怒りの主な喚起因として、相手の怠慢によるものだと判断された場合や、相手の不当な意図的加害によるものと判断された場合などがあげられており、これら２つの喚起因が怒りの経験の大半を占めていた。不当な意図的加害に対して喚起される怒りの強さは、大渕（1982）が行なった実験によっても明らかにされている。また少年を対象に行なった実験では、同じ被害事態においての、加害意図と被害少年の攻撃性の関係による、攻撃反応の差異を検討している（Dodge，1980)。この実験では、加害少年の「敵意」が説明され、その意図性が示された条件と、「親切心」が説明された条件とを比較したところ、明らかに「敵意」条件に、より強い攻撃反応が見られている。この結果は、大渕（1982）の実験と同様の結果と言える。また両条件下における少年の攻撃性による攻撃反応には有意差は認められていない。つまり、攻撃的な少年も、非攻撃的な少年も、「敵意」条件においてはより強い攻撃反応を見せ、「親切心」条件ではより弱い反応を示している。しかし攻撃的な少年は非攻撃的な少年より、相手の意図が不明な状況で、より強い攻撃反応を示すことを見出している。

経験した怒り喚起因を問う他の調査においても、頻出回数の上位を不当な意図的加害によるものと判断できる原因が多く占めていたが、一方で「意見が合わない」、「意見が食い違う」、「意見される、反論される」などの、相手の意見の表明に関する項目も幾つかあげられていた（森下，2003)。この「意見が合わない」、「意見される、反論される」などの現象は、相手の怠慢によるものでも、相手の不当な意図的加害でもない。平木（1993）は主張性を「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、そして相手が同じように発言することを奨励しようとする」ことと定義しているが、森下（2003）の調査で得られた相手の意見の表明に関する項目は、この平木(1993）のいう主張性の一側面であると考えられる。

不当な意図的加害や相手の怠慢による物理的、心理的侵害に対して怒りを感じることは、その状況下における自己防衛のために必要であり、その後の対人関係を考慮しても、望ましい、肯定的な感情喚起であると考えられる。しかし森下（2003）の調査で得られたような、表出者が物理的、心理的侵害を意図していない行動、すなわち意見の表明を含む、日常の対人コミュニケーションに対して怒りを喚起することは、その後の対人関係の崩壊に繋がりかねない、望ましくない感情喚起と考えられる。

意図性の曖昧な相手の行動によって生じる不快事態に対する、怒り喚起に関連する要因として、これまで攻撃性が検討されている。前述の Dodge（1980）による少年を対象に行なった実験において、相手の意図が不明な状況における、攻撃的な少年の強い攻撃反応が示された。しかし攻撃性は、複数の構成概念から成る複合的な特性であることが指摘されているが（大渕・北村・織田・市原，1994)、この状況下において攻撃性のどの側面が関連しているのかの検討はこれまでなされてこなかったように思う。秦（1990）は攻撃行動や攻撃性を、身体的暴力、敵意、いらだち、言語的攻撃、間接的攻撃、置き換えの６側面から捉えている。本研究では、この６側面のうち敵意といらだちを用い、これらと相手の意図が不明な否定感情表明に対して感じる怒りの強さとの関連を検討する。

ところで土居（1971）は、日本人心性の重要な要素として「甘え」をあげている。そして「甘える」ことを、“ An intransitive verb meaning ‘to depend and presume upon another’ s love or bask in another’ s indulgence’ ” (Doi，1992，p. 8 ）と定義し、さらに「甘え」には、相手との相互的な信頼関係に基づいた健康的で素直な甘えと、一方的に相手に要求するような屈折した甘えがあると述べている（土居，1971)。屈折した甘えは、「甘えたいのに甘えられない」といった基本的欲求が転換し、「すねる」、「ひがむ」、「ふてくされる」などの形態をとると土居（1971）は提唱するが、欲求の転換により、この他怒りの喚起といった形態をとることも十分考え得る。稲垣（2007）は、この屈折的甘えを中心的概念とした、「『甘え』が満たされず、甘えたくとも甘えられないがゆえに、一方的で要求がましい自己愛的要求を伴う『甘え』」(p.15）を自己愛的甘えと呼んでいる。そもそも自己愛と怒り喚起の強い関連に関する知見（湯川，2003；湯川・日比野，2003）が既に得られていることからも、自己愛的甘え傾向を有する者がより強く怒りを喚起すると考えられるため、本研究では、自己愛的甘え傾向と、相手の意図が不明な否定感情表明に対して感じる怒りの強さとの関連も検討する。

相手からの否定感情表明に対する怒り喚起に関連する要因として、この他自己受容を取り上げ、検討を行なう。

Rogers（1949）によれば、自己受容とは自己のパーソナリティをありのまま受け入れる態度、構えである（ただし川岸，1972による)。つまりポジティブな側面のみならず、自身のネガティブな感情や特性をも、そのままわがものとして受け入れる態度を指している。この自己受容と怒り喚起の直接的な関係性を示す研究はこれまでほとんど見られていないが、自己受容と攻撃性との間に、アサーションを介した間接的な関係性が示されている（沢崎，2006）ことから、本研究では、自己受容と相手の意図が不明な否定感情表明に対して感じる怒りの強さとの関連の検討も試みる。

方　法

調査対象：首都圏の私立大学に通う大学生121名（男性59名，女性62名）
　　平均年齢20.41歳（SD＝4.55）
調 査 日：2010年７月
手 続 き：大学の講義時間内に質問紙を配布、実施し、回収
　　実施時間は10分から15分

質問紙の構成

１．友人からの否定感情表明

①　調査対象者に友人を一人思い浮かべてもらい、その友人との親しさを、「まったく親しくない（１点)」から「非常に親しい（７点)」までの７件法で回答を求めた。

②　家族または友人から向けられた行動に対して、どのように感じるか、またどのように行動すると思うかを問う質問項目を作成し、得られた回答を因子分析した結果、長澤（2010）は「攻撃行動」因子、「意見表明」因子、「否定感情表明」因子の３因子を抽出した。本研究では、このうち友人からの「否定感情表明」因子に含まれる13項目を使用した。各行動が①で思い浮かべた友人から向けられた時どれくらい強く怒りを感じるか、「怒りを感じる強さ」について「まったく感じない（１点)」から「非常に感じる（７点)」までの７件法で回答を求めた。

２．敵意的攻撃インベントリー

秦（1990）の作成した敵意的攻撃インベントリー（Hostile Aggression Inventory，以下 HAI とする）のうち、その下位尺度である「敵意」10項目と「いらだち」８項目を使用した。HAI は、個人の攻撃行動や攻撃性の程度を多面的に測定することを目的として作成された。秦（1990）はこの HAI の作成にあたり、Buss and Durkee（1957）の Hostility-Guilt Inventory（HGI）の翻訳と、Y-G、EPPS などの攻撃に関する項目を参考にした。秦（1990）では５ないし７件法で回答を求めているが、本研究では「まったくあてはまらない（１点)」から「非常にあてはまる（７点)」までの７件法で回答を求めた。

３．自己愛的甘え

自己愛的甘え尺度（稲垣，2007）32項目を使用した。稲垣（2007）は、甘えの多義性を考慮したうえで、自己愛的な特徴をもつ甘えに焦点を当て、尺度を作成した。自己愛的甘えを稲垣（2007）は、「屈折的甘えを中心的な概念としながら、他者に対して配慮や過度の許容を期待するような、一方的な要求がましさも含むものである」(p.15）と捉え、作成を進めていった結果、「配慮の要求」、「許容への過度の期待」、「屈折的甘え」の下位尺度を得た。本研究ではこれら３下位尺度、32項目を用い、「まったくあてはまらない（１点)」から「非常にあてはまる（７点)」までの７件法で回答を求めた。

４．自己受容

自己肯定意識尺度（平石，1990）のうち自己受容４項目を使用した。平石（1990）は青年期における自己意識の発達の一次元である自己肯定性次元の個人差を測定することを目的に本尺度を作成した。この自己肯定意識尺度（平石，1990）は「対自己領域」と「対他者領域」に分けられており、それぞれが３つの下位尺度をもつ。本研究では「対自己

領域」の下位尺度である「自己受容」を用い、「まったくあてはまらない（１点)」から「非常にあてはまる（７点)」までの７件法で回答を求めた。

結　果

１．友人からの否定感情表明の分析

①　思い浮かべた友人との親しさを検討したところ、有効回答者のうち約98%が「５：やや親しい」から「７：非常に親しい」友人を思い浮かべたと回答した。「６：かなり親しい」と「７：非常に親しい」友人を思い浮かべたのは約85%で、今回の調査では、おおむね親しい友人を思い浮かべ、以下の回答を行なったと言える。

②　①で思い浮かべた友人から否定感情表明が向けられたと想定し、この時感じる怒りの強さを問い、その回答について主因子法、Promax 回転による因子分析を行なった。その結果２因子構造を得た。Table１に因子分析結果、因子間相関と Cronbach のα係数を示した。

第１因子は、「あなたがいやがることを言われる」、「大声で威嚇される」、「一方的にケンカをしかけられる」など、その言動により相手が受け手を傷つけることを十分に予測し得る状況でその行為が行なわれる、もしくは意図的に危害を加えようとする行為が行なわれる内容の項目で構成されていたため、「意図的加害」因子と命名した。第２因子は、「あなたの無神経な言い方で傷ついたと言われる」、「あなたが言った言葉で腹がたったり不愉快になったと言われる」、「あなたがしたことでいやな気持ちがしたと言われる」などの項目が含まれた。これを、相手が回答者の言動に対し不快感情を抱いたことの表明であると解釈し、「不快表明」因子と命名した。

各下位尺度の内的整合性を検討するために Cronbach のα係数を求めたところ、「意図的加害」はα＝.90、「不快表明」はα＝.87とそれぞれ十分な値を得た。

Table１　否定感情表明　因子分析結果（主因子法，Promax 回転）

	意図的加害	不快表明	α
N09 あなたがいやがることを言われる	.97	－.18	
N08 大声で威嚇される	.83	－.07	.90
N02 一方的にケンカをしかけられる	.79	－.03	
N13 いやみを言われる	.74	.10	
N10 分担した仕事をあなたがしていないと言われる	.60	.15	
N07 面と向かって悪口を言われる	.57	.18	
N05 ばかにするようなことを言われる	.51	.14	
N03 あなたの無神経な言い方で傷ついたと言われる	－.14	.82	
N04 あなたが言った言葉で腹がたったり不愉快になったと言われる	.05	.79	.87
N11 あなたがしたことでいやな気持ちがしたと言われる	.03	.78	
N12 あなたが頼んだことができない時にはっきり「できない」と言われる	－.05	.68	
N01 あなたの行動が相手にとって迷惑だと言われる	.13	.64	
N06 あなたが頼んだことをやりたくないとはっきり言われる	.27	.52	
因子間相関		.63	

２．HAI の分析

本調査で使用した HAI の下位尺度である、敵意といらだちの構造を確認するため、両下位尺度を併せ、計18項目で主因子法、Promax 回転による因子分析を行なった。因子負荷量.40未満の項目と、２つ以上の因子に高い負荷量を示す項目、合計３項目を削除し因子分析を繰り返した結果、最終的に２因子構造を得た。Table２に因子分析結果、因子間相関と Cronbach のα係数を示した。

第１因子は、「私は、物事がうまくいかないと、気持ちがイライラして、すぐ人にあたる」、「私は、気に入らないことがあると、当たり散らすようなことがある」、「私は、よくイライラする」など、いらだち傾向に関する項目で構成さ

Table 2　HAI 因子分析結果（主因子法，Promax 回転）

	いらだち	敵意	α
H03 私は、物事がうまくいかないと、気持ちがイライラして、すぐ人にあたる	.85	−.18	
H04 私は、気に入らないことがあると、当たり散らすようなことがある	.84	−.14	.88
H10 私は、よくイライラする	.83	.00	
H11 私は、カッとなりやすくて、我慢強いところがない	.71	.06	
H01 私は、気が短い方である	.64	.05	
H05 私は、ちょっとしたことですぐふくれたり、すねたりすることがある	.54	.29	
H17 私は、ささいなことでイライラすることはない ▲	−.44	−.22	
H12 私の陰口を言う人がいると思う	−.15	.77	
H07 私のまわりには、気にいらない人が多い	−.04	.67	.80
H14 私は、人から不公平な扱いをされたことがある	.04	.65	
H02 私は、友達や先生から嫌われていると思う	.04	.63	
H09 私は、ほとんど人は、正直でないと思う	.05	.52	
H08 私のまわりには、いなくなった方が良いと思う人がいる	−.04	.49	
H06 私は、いつも損をしていると思う	.22	.46	
H16 私を怒らせたり、ばかにしたりする人は、ほとんどいないと思う ▲	.02	−.40	
	因子間相関		
▲は逆転項目		.55	

れていた。この因子は、秦（1990）のいらだち因子に含まれる項目で構成されていたため、「いらだち」因子と命名した。第２因子は、「私の陰口を言う人がいると思う」、「私のまわりには、気にいらない人が多い」、「私は、人から不公平な扱いをされたことがある」などの項目で高い因子負荷量が見られた。この因子は秦（1990）の敵意因子を構成する項目と類似の項目で構成されていたため、本研究でもこれを用い、「敵意」因子と命名した。

各下位尺度の内的整合性を検討するために Cronbach のα係数を求めたところ、「いらだち」はα＝.88、「敵意」はα＝.80とそれぞれ十分な値を得た。

３．自己愛的甘えの分析

自己愛的甘え尺度の構造確認のため、主因子法、Promax 回転による因子分析を行なった。因子負荷量.40未満の３項目を削除し因子分析を繰り返した結果、最終的に３因子構造を得た。Table 3 に因子分析結果、因子間相関と Cronbach のα係数を示した。

第１因子は、「失敗しても、許してくれるだろうと思いながら、行動する」、「わがままなことを言っても、そんなに嫌われることはないと思うことがある」、「相手に対して失礼なことをしても、そのうちに許してくれると思う」など、相手に対し過度に許容を期待する項目で構成されていた。この因子は、稲垣（2007）の許容への過度の期待因子に含まれる項目と同様の項目で構成されていたため、この因子名を用い、「許容への過度の期待」因子と命名した。第２因子は、「私の気持ちや願いを察して、もっと居心地をよくさせて欲しいと思うことがある」、「周りの人に対して、何も言わなくても、自分のして欲しいと願っていることを汲みとってほしいと思うことがある」、「周りの人に対して、自分から言わなくても、もっと気持ちを察して欲しいと思うことがある」などの項目で構成されていた。これらは周りの人に対して自分への配慮を期待、要求する項目であり、いずれも稲垣（2007）の配慮の要求因子に含まれる項目であった。そのため本研究でも「配慮の要求」因子と命名した。第３因子は、「私は、自分が思ったとおりにならないとすねる」、「私は、物事が自分の思い通りにならないとひねくれる」、「私は、ちょっとしたことでもふてくされる」など、一方的かつ素直でない甘えの項目で構成されており、これらは稲垣（2007）の屈折的甘え因子に含まれる項目であった。そのため本研究でも稲垣（2007）と同じく「屈折的甘え」因子と命名した。

各下位尺度の内的整合性を検討するために Cronbach のα係数を求めたところ、「許容への過度の期待」はα＝.90、「配慮の要求」はα＝.89、「屈折的甘え」はα＝.84と高い値を得た。

Table３　自己愛的甘え尺度の因子分析結果（主因子法，Promax 回転）

	許容への過度の期待	配慮の要求	屈折的甘え	α
A15 失敗しても、許してくれるだろうと思いながら、行動する	.80	.05	−.09	
A30 わがままなことを言っても、そんなに嫌われることはないと思うことがある	.77	.12	−.04	.90
A24 相手に対して失礼なことをしても、そのうちに許してくれると思う	.77	.03	.03	
A19 相手が嫌がるとわかっていることをしても、きっと許してくれると思うことがある	.72	−.05	.12	
A09 自分の不注意でどんなに迷惑をかけても、周りの人は結局許してくれると思うことがある	.70	−.01	.07	
A16 決められた約束を破っても、どうにか許してもらえると思うことがある	.66	−.02	−.11	
A01 不適切なことをしたとしても、大目に見てもらえると思う	.65	−.14	−.06	
A18 自分の利益の為に、相手に大きな迷惑をかけたとしても、大目にみてもらえると思うことがある	.64	.04	.13	
A26 責任を果たさなくても、周りの人はきっと許してくれると思うことがある	.60	−.12	.23	
A27 初対面で立ち入ったことをきいても、相手はたいして気を害することはないと思う	.56	−.07	−.24	
A14 常識からかなりはずれたことをしても、周りの人に受け入れてもらえると思うことがある	.48	.11	.02	
A05 重要な場面で失敗しても、たいして責められることなく、許してもらえると思うことがある	.48	.14	−.04	
A11 私の気持ちや願いを察して、もっと居心地をよくさせて欲しいと思うことがある	.00	.87	−.14	
A12 周りの人に対して、何も言わなくても、自分のして欲しいと願っていることを汲みとってほしいと思うことがある	.01	.83	−.07	.89
A22 周りの人に対して、自分から言わなくても、もっと気持ちを察して欲しいと思うことがある	−.08	.80	.00	
A31 自分が気がねしていることに、気づいて欲しいと思うことがある	.03	.75	−.04	
A20 たとえ言葉に出さなくても、周りの人にもっと私の気持ちをわかって欲しいと思うことがある	−.05	.74	.01	
A25 周りの人の気くばりが足りないので、不満に感じることがある	.04	.60	.14	
A10 自分が遠慮していることに相手が気づかないと、腹立たしく思うことがある	.15	.55	.11	
A04 私の周りの人の態度は気がきかないと思うことがある	−.08	.55	.11	
A08 私の周りには気がつかない人が多いと思う	.03	.42	.17	
A06 周りの人に対して、もっと私に気をつかって欲しいと思うことがある	.18	.42	−.04	
A23 私は、自分が思ったとおりにならないとすねる	−.04	−.02	.83	
A29 私は、物事が自分の思い通りにならないとひねくれる	−.09	.10	.80	.84
A17 私は、ちょっとしたことでもふてくされる	.09	−.09	.75	
A32 私は、ちょっとしたことでもひがむ	−.12	.02	.69	
A07 私は、ささいなことで人をうらむ	.18	.01	.47	
A13 私は、物事がうまくいかないとやけくそになる	.26	.06	.43	
A28 私は、いやなことがあるとむかつく	−.24	.27	.41	
因子間相関				
		.29	.43	
			.57	

４．自己受容の分析

自己受容尺度の構造確認を行なった。平石（1990）が既に因子分析を行ない、その信頼性を確認した自己肯定意識尺度の下位尺度である自己受容４項目を使用したことから、ここでは１因子構造を想定し、主成分分析を行なった。その結果４項目すべてにおいて.40以上の負荷量を示したことから、１因子構造と判断した。平石（1990）の因子名を用い、ここでも「自己受容」因子と命名した。

内的整合性を検討するために Cronbach のα係数を求めたところ、α＝.81であった。Table４に主成分分析結果と Cronbach のα係数を示した。

Table４　自己受容因子分析結果（主成分分析）

	自己受容	α
S02 自分なりの個性を大切にしている	.89	
S01 自分の個性を素直に受け入れている	.87	.81
S04 自分の良いところも悪いところもありのままに認めることができる	.78	
S03 私には私なりの人生があってもいいと思う	.64	

５．下位尺度間の相関

友人からの否定感情表明、HAI、自己愛的甘えの各下位尺度と、自己受容それぞれに相当する項目の平均値を算出し、これらを下位尺度得点とした。各下位尺度得点をもとに、各下位尺度間の Pearson の相関係数を求めた。Table５に下位尺度間の相関係数、平均値と標準偏差を示した。

友人からの意図的加害では、配慮の要求との間に弱い正の相関（r＝.27, p＜.01）を示した。また友人からの不快表明では、敵意との間に弱い正の相関（r＝.22, p＜.05)、配慮の要求（r＝.33, p＜.001）と屈折的甘え（r＝.22, p＜.05）との間にも弱い正の相関を示した。

いらだちでは、屈折的甘えとの間に強い正の相関（r＝.70, p＜.001）が見られた。その他配慮の要求との間には弱い正の相関（r＝.24, p＜.01)、また自己受容との間には弱い負の相関（r＝－.24, p＜.01）を示した。敵意では、屈折的甘えとの間に中程度の正の相関（r＝.54, p＜.001)、また配慮の要求との間にも中程度の正の相関（r＝.48, p＜.001）を示した。その他、自己受容との間には弱い負の相関（r＝－.29, p＜.01）を示した。

屈折的甘えでは、自己受容との間に弱い負の相関（r＝－.30, p＜.001）を示した。

Table５　各下位尺度間の相関係数および各下位尺度の平均値、標準偏差

	不快表明	いらだち	敵意	許容への期待	配慮の要求	屈折的甘え	自己受容	平均値	SD
友人からの否定感情表明									
意図的加害	.62***	－.01	.10	－.06	.27**	.11	.06	4.10	1.51
不快表明		.11	.22*	.17	.33***	.22*	－.09	3.10	1.24
HAI									
いらだち			.51***	.18*	.24**	.70***	－.24**	3.55	1.33
敵意				.15	.48***	.54***	－.29**	3.63	1.06
自己愛的甘え									
許容への期待					.30***	.39***	－.03	2.98	1.03
配慮の要求						.57***	－.16	3.59	1.17
屈折的甘え							－.30***	3.40	1.18
自己受容								5.19	1.23

※ * p＜.05, ** p＜.01, *** p＜.001

６．性差

各下位尺度における性差を検討するためｔ検定を行なった。Table６に男女別平均値、標準偏差またｔ検定結果を示した。意図的加害において、男性の平均値は3.74（SD 1.51）、女性の平均値は4.44（SD 1.43）で、女性が男性より有意に高い得点を示していた（t(119)＝2.61, p＜.05)。しかしその他不快表明、HAI、自己愛的甘えや自己受容の各下位尺度においては、男女間に有意差は見られなかった。いらだちにおいては、女性の平均値が3.71（SD 1.25)、男性の平均値が3.39（SD 1.39）と女性が僅かに高い値を示したが、有意差は認められなかった（t(119)＝1.30, n. s.)。

Table６　各下位尺度の男女別平均値、標準偏差およびｔ検定結果

	男性 n=59		女性 n=62		
	平均値	SD	平均値	SD	ｔ値
意図的加害	3.74	1.51	4.44	1.43	2.61*
不快表明	3.00	1.34	3.19	1.14	.82
いらだち	3.39	1.39	3.71	1.25	1.30
敵意	3.65	1.17	3.60	.95	.26
許容への期待	3.12	1.12	2.85	.93	1.45
配慮の要求	3.72	1.32	3.47	.99	1.17
屈折的甘え	3.39	1.25	3.41	1.12	.08
自己受容	5.32	1.26	5.07	1.20	1.13

※ * p＜.05

７．否定感情表明と各下位尺度との関係

否定感情表明の２つの下位尺度と、HAI、自己愛的甘え、そして自己受容の各下位尺度との関係を検討した。各下位尺度を高・中・低３群に分け、その得点の高さの違いによる、否定感情表明を受けた時に感じる怒りの強さの違いを検討した。本研究では高・中・低３群のうち、高低２群の比較を行なった。Table７、８に平均値、標準偏差またｔ検定結果を示した。

意図的加害における高低差の検討を行なったところ、配慮の要求高群（平均値＝4.35，SD＝1.43）は配慮の要求低群(平均値＝3.33，SD＝1.62）より有意に高い得点を示していた（t(67)＝2.77, p＜.01)。しかしその他の下位尺度においては、高低２群間に有意差は見られなかった。

次に不快表明における高低２群の比較を行なった。その結果、意図的加害と同様に、配慮の要求高群（平均値＝3.51，SD＝1.19）は配慮の要求低群（平均値＝2.28，SD＝1.09）より有意に高い得点を示していた（t(67)＝4.49, p＜.001)。また敵意高群（平均値＝3.39，SD＝1.18）は敵意低群（平均値＝2.63，SD＝1.33）より有意に高い値を示していた（t(66)＝2.47, p＜.05)。有意差は見られなかったものの、許容への期待高群（平均値＝3.32，SD＝1.09）と低群（平均値＝

Table７　意図的加害の各下位尺度高低別平均値、標準偏差およびｔ検定結果

	高群			低群			
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	ｔ値
いらだち	37	4.27	1.49	37	3.93	1.47	.98
敵意	31	4.26	1.52	37	3.93	1.57	.88
許容への期待	38	3.99	1.29	39	4.14	1.69	.43
配慮の要求	33	4.35	1.43	36	3.33	1.62	2.77**
屈折的甘え	46	4.25	1.49	40	3.99	1.59	.80
自己受容	42	4.23	1.43	33	4.28	1.68	.15

※ ** p＜.01

Table 8　不快表明の各下位尺度高低別平均値、標準偏差および t 検定結果

	高群			低群			
	n	平均値	SD	n	平均値	SD	t 値
いらだち	37	3.23	1.15	37	2.83	1.42	1.34
敵意	31	3.39	1.18	37	2.63	1.33	2.47*
許容への期待	38	3.32	1.09	39	2.78	1.29	1.97
配慮の要求	33	3.51	1.19	36	2.28	1.09	4.49***
屈折的甘え	46	3.30	1.03	40	2.78	1.38	1.94
自己受容	42	2.98	1.33	33	3.24	1.19	.90

※ * p＜.05, *** p＜.001

2.78，SD＝1.29）の比較において、その差に優位傾向が見られた（t(75)＝1.97，p＝.05)。その他の下位尺度においては、高低２群間に有意差は見られなかった。

以上の結果から、意図的加害、不快表明の両因子に共通して高低間に差が見られたのは配慮の要求であることが示された。配慮の要求は、自分への気遣いの要求であり、この値が高いということはすなわち、周囲に対して自分への気遣いを要求する気持ちが強いことである。つまり自分への気遣いを要求する気持ちが強い者は弱い者より、他者からのネガティブな感情、態度に対して、より強く怒りを感じるという結果が得られたことになる。

考　察

本研究では、友人からの否定感情表明に対して感じる怒りの強さに関連する諸要因を明確にすることを目的とした。まず否定感情表明の構造を確認するため因子分析を行なった。長澤（2010）では、他者から向けられた行動に対しての感情喚起とその表出を問い、得られた回答を因子分析した結果、「攻撃行動」因子、「意見表明」因子、「否定感情表明」因子の３因子を得ており、言語的攻撃に関する項目は身体的攻撃と共に攻撃行動因子に含まれていた。本研究では、他者から向けられた行動のうち否定感情表明因子のみを用いた。長澤（2010）においては１因子を構成していた13項目に対し本研究で因子分析を行なったところ、２因子が抽出された。第１因子は、相手が受け手を傷つけることを予測し得る状況で、一方的に否定的な言葉や態度を表明している項目で構成されていたため「意図的加害」と命名したが、これらの項目は、より言語的攻撃の要素を含む項目であった。一方第２因子は、相手が回答者の言動に対し不快感情を抱いたことを表明している項目で構成されており、これを「不快表明」因子と命名した。意図的加害因子と異なり、これらの項目において相手は、否定感情を表明するに至る原因が回答者側にあると認識していると考えられる。受け手である回答者が、結果的にネガティブな感情を喚起されるとしても、それは送り手である相手が意図したものではなく、「あなたのせいで不快な思いをした」という、いわば被害者意識を表明したことに他ならない。意図性の有無や原因の所在という視点で異なる２つの因子が得られたと言えるであろう。

否定感情表明、HAI、自己愛的甘えと自己受容の各下位尺度において性差の検討を行なったところ、性差が見られたのは意図的加害のみであった。長澤（2010）は友人からの否定感情表明に対して、女性が男性より強く怒りを感じることを見出しているが、本研究においても意図的加害では同様の結果が得られたが、不快表明では有意差は得られなかった。長澤（2010）では友人からの攻撃行動に対して怒りを感じる強さに有意な性差は見られなかったが、本研究では否定感情表明の２因子のうち、より言語的攻撃の要素を含む意図的加害において性差が見られ、長澤（2010）とは異なる結果が得られた。本研究では、友人をひとり思い浮かべ、その友人から否定感情が向けられたと想定し怒りを感じる強さについての回答を求めたが、その友人はおおむね回答者にとってとても親しい友人であった。長澤（2010）では思い浮かべた友人との親しさについて言及されていないため、この点においての差が何らかの違いをもたらしている可能性もあり、友人との親しさの違いも一要因として検討がなされるべきだと思われる。今回検討した、その他すべての要因では性差が見られなかったため、意図的加害で得られた性差を説明し得る要因を見出すことはできなかった。意図的加害を向けられた時に感じる、怒りの強さの性差に関連する要因に関しては、今後更なる検討が必要であると思われる。

否定感情表明の２つの下位尺度における、HAI、自己愛的甘え、自己受容それぞれの得点高低２群の比較を行なっ

た。その結果、友人から意図的加害が向けられた時怒りを感じる強さには、いらだち、敵意といった攻撃性の強さとの関連は認められなかった。つまりいらだち傾向、敵意傾向の強い者を弱い者と比較した時、感じる怒りの強さに違いがなかったことを示しており、これは Dodge（1980）の実験で得られた結果を支持するものであった。

また同実験において、相手の意図が不明な状況において攻撃的な少年の強い攻撃反応が示されているが、本研究でも、不快表明において敵意傾向の強い者が弱い者より強い怒りを感じているという結果を得た。不快感情を相手に表わされるということは、受け手にとって決して快いことではない。しかし感情表明を行なうことで、表明者が意図的に受け手を侵害しようとしているか、という点においては明確ではなく、不快感情の表明も相手の意図が不明な状況であると考えられる。これにより、本研究で得られた結果が Dodge（1980）の実験結果を支持するものであると考えられると同時に、攻撃性のいくつかの側面のうち、強い敵意傾向を有する者にこの傾向が認められるが、強いいらだち傾向を有する者には認められないことが明らかになった。

また、友人から否定感情表明が向けられた時怒りを感じる強さには、自己愛的甘えのうち配慮の要求との間に関係性が見出された。配慮の要求とは、自分が他者からの特別な配慮を受けることを当然のことと受け止め、それに値すると感じる傾向のことである（稲垣，2007)。稲垣（2007）はこの傾向の背後に、脆弱性やある種の特権意識、誇大性といったものの存在を示唆している。このような配慮の要求傾向を有する者は、相手から向けられた不快事象に対し、その意図性を問わず強く怒りを喚起するということで、そこには意図知覚が影響を与えていないことを示す結果が得られたと言える。本研究において回答者の多くは、とても親しい友人を想起している。自分にとって親しい存在である友人から、自分が当然受けるはずの配慮を受けられないばかりでなく、不快事象をももたらされることが、その不快事象の原因を問わず、より強い怒り感情となって現れると考えられる。今後、親しさの程度の異なる友人関係を含めた、対象者との関係の検討が必要であると思われる。

引用文献

Averill, J.R. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion.* New York: Springer-Verlag.

Buss, A.H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology,* 21, 343-349.

Dodge, K.A. (1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development,* 51, 162-170.

土居健郎（1971).「甘え」の構造　弘文堂

Doi, T. (1992). On the concept of amae. *Infant Mental Health Journal,* 13, 7-11.

秦　一士（1990)．敵意的攻撃インベントリーの作成　心理学研究，61，227-234.

平石賢二（1990)．青年期における自己意識の発達に関する研究（Ｉ）―自己肯定性次元と自己安定性次元の検討　名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科，37，217-234.

平木典子（1993)．アサーション・トレーニング ―さわやかな自己表現のために―　金子書房

稲垣実果（2007)．自己愛的甘え尺度の作成に関する研究　パーソナリティ研究，16，13-24.

川岸弘枝（1972)．自己受容と他者受容に関する研究 ―受容測度の検討を中心として―　教育心理学研究，20，170-178.

森下朝日（2003)．怒りに類する感情の喚起と表出に及ぼす対人関係の影響　国際文化学，8，101-118.

長澤里絵（2010)．怒りの喚起因としての他者行動による怒りの感情生起や表出の性差　日本応用心理学会大会発表論文集，77，62.

大渕憲一（1982)．欲求不満の原因帰属と攻撃反応　実験社会心理学研究，21，175-179.

大渕憲一・北村俊則・織田信男・市原眞紀（1994)．攻撃性の自己評定法：文献展望　季刊精神科診断学，5，443-445.

大渕憲一・小倉左知男（1984)．怒りの経験（1)：Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況　犯罪心理学研究，22，15-35.

Rogers, C.R. (1949). A coordinated research in psychotherapy. A non-objective introduction. *Journal of Consulting Psychology,* 13, 149-153.

沢崎達夫（2006)．青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係　目白大学心理学研究，2，1-12.

高木　修・阿部晋吾（2006）．怒りとその表出に関わる心理学的研究の概観　関西大学社会学部紀要，37，71-86.
湯川進太郎（2003）．青年期における自己愛と攻撃性 ―現実への不適応と虚構への没入をふまえて―　犯罪心理学研究，41，27-36.
湯川進太郎（2005）．バイオレンス ―攻撃と怒りの臨床社会心理学―　北大路書房
湯川進太郎・日比野　桂（2003）．怒り経験とその鎮静化過程　心理学研究，74，428-436.